国際日本研究センター
International Center for Japanese Studies

NEWSLETTER
ニューズレター
東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies
http://www.tufs.ac.jp/icjs/
2020.04
No. 26

○ 対照日本語部門主催「外国語と日本語との対照言語学的研究」第 29 回研究……p.1
"Contrastive Linguistic Research on Japanese and Foreign Languages" Workshop

○ 国際ワークショップ＆講演会『済州と沖縄をつなぐ』報告……p.4
Report on International Workshop and Lecture "Linking Jeju and Okinawa"

○ 今後の活動予定……p.5

対照日本語部門「日本語と外国語の対照言語学的研究」第 29 回研究会
"Contrastive Linguistic Research on Japanese and Foreign Languages" Workshop

2019 年 12 月 14 日、東京外国語大学語学研究所にて、『外国語と日本との対照言語学的研究』第 29 回研究会が行われた。

初めに本学の五十嵐孔一氏（朝鮮語学）とプヨ・バティスト氏（意味論、フランス語学）による研究発表が行われ、最後に名古屋大学名誉教授の藤村逸子氏（フランス語学、対照研究）ぶによる講演が行われた。

五十嵐孔一氏（題目「陳述と진술について―日朝対照文法論の観点から―」）では、日本語の陳述と朝鮮語の진술を対照的に論じることで、日本語と朝鮮語の特徴を比較的に示すと同時に、日本語の陳述の先行研究を概観することで、朝鮮語ではさほど詳しくは研究されてこなかった진술に対して、今後どのような研究が可能であるかについての問題提起を行っている。

五十嵐孔一 氏（東京外国語大学）
陳述と진술について
―日朝対照文法論の観点から―

陳述という語は定義が難しいが、一般的には、文を文たらしめる働き・作用とみなせる。個々の単語は恣意的に並べられてだけでは文とはならず、文として認識されるには何らかの働きが必要であるがその働きが陳述とみなせる。本発表では、20 世紀の国語学を代表する山田孝男、時枝誠記、三上章、服部四郎、奥津敬一郎、渡辺実、寺村秀夫、尾上圭介らの陳述の捉え方を丁寧に紹介する。陳述は山田義男の文法論において初めて言及された概念である。山田は陳述に対して「表明」の同義語として用いながら、陳述と主語と述語を統一する作用である「統覚作用」を明確に区別した。一方、陳述の解釈は後の学者によって再検討され議論の焦点になった。例えば、時枝は陳述を「文を成立させる要素」として論じている。ここでは、「統覚作用」と「陳述」の明確な区別は見られず、陳述の機能を行う「辞」に対して、首位と賓位を統一する機能まで認めている。このような背景に基づきながら、日本語学では、陳述とは何かという点に対して、三上章、服部四郎、奥津敬一郎、渡辺実、寺村秀夫、尾上圭介が見解を示していった。

一方、朝鮮語学では、崔鉉培（1937）に山田文法の影響が見られることが指摘されており、そこでは、陳述という語も用いられている。崔では基本的に、山田の記述を踏襲しており、統覚作用と陳述の区別を行っている。日本語と朝鮮語には言語的に類似した点が多々見られるが、両言語の文法論の歴史を比べると、日本語では、陳述に関する議論が盛んである一方で、朝鮮語では、目立った議論がなされていないという対照的な傾向が見られる。

本発表では、このような陳述をめぐる日朝の文法論の歴史的な背景を振り返り、日朝対照文法論を試みている。（大谷直輝）

次に、プヨ・バティスト氏（題目「名詞複数形に関する

プヨ・バティスト氏（東京外国語大学）
名詞複数形に関する日仏対照研究

日仏対照研究」）の発表では、日仏語における名詞複数形について考察がなされた。「ふる池やかはづ飛びこむみづの音（芭蕉）」の俳句は大変有名であるが、この句に登場する「かはづ」が一匹だけであることが日本人の常識となっているようである。例えば、『評解名句辞典』には以下のように書かれている。

「古い池の面は、静かに澱んでいる。と突然蛙が一匹その中に飛びこんだ。その水音があたりの静寂を破ったが、再びあたりには更に深い静寂が漂う。」

このような解釈を踏まえ、フランス語訳でも、une grenouille のように単数形で書かれることが多いが、蛙の生態的な特徴（一匹が水に飛びこむと、まわりの蛙も次々と水に飛びこむ習性をもつ）を考慮して、「かはづ」を複数形にしている訳も見られる。つまり、この俳句の表現からは、「かはづ」を単数形にすべきか複数形にすべきかという文法上の違いは明白ではないのである。果たして、フランス語の単数形／複数形の区別をそのまま適用して日本語の「かはづ」を翻訳することはできるのだろうか。

このような問いに答えるため、プヨ・バティスト氏は、名詞の複数形の意味と、その用法が適用される「複数性」という概念の位置付けを確認しつつ、日仏語における名詞複数形の違いを考察した。

その結論としては、日本語とフランス語では、数の体系は大きく異なっている、ということであった。日本語にはフランス語文法の根幹とも言える単数形と複数形の区別がないと一般的には考えられているが、日本語自体に数の概念がないのか、といえばそうではなく、フランス語のように顕在化してないだけで、数の体系は日本語の中に確かに機能している。例えば、「たち」「ら」「ども」「諸」などの接辞によって、また、「我々」「家々」などの語彙形式によって複数性を示すことができる。

一方、フランス語の名詞／代名詞／動詞などには、文法上の数が存在し、数えられるものについては、単数形か複数形かのいずれかが適切に選択しなければならない。フランス語で表現する際には、数を曖昧にしておくことは許されない。それに対して、日本語では、名詞／代名詞／動詞などは「数に対して無関心」である。これは、フランス語とは異なり、数を示す形態的な語尾が存在していないからである。単語の形態によって、単数か複数かという区別がなされない。

このように、数と名詞との結合関係は言語によって異なり、数と名詞が直接結びつくフランス語のような言語もあれば、数と名詞が必ずしも結びつかない日本語のような言語もある。

氏の発表は、数の文法的範疇が数の概念の言語化にどのように関わるのか、また日本語とフランス語ではどのように異なるかということを知るうえで大変示唆に富んだ発表であった。日本語にもフランス語にも数の概念は存在するが、名詞の文法的範疇として表現を行わなくてはならないレベルで単数と複数が区別されるかどうか、という点で大きく異なっている。フロアからは、言語相対的観点からのコメントもあり、大変興味深い議論が行われた。

僭越ながら、筆者のコメントを補足させてもらう。フランス語での名詞は、他のロマンス語に比べても、名詞語尾の音声面での弱化に伴い、形態論レベルでの「単数」「複数」の区別が弱まっている言語である。不規則変化をする一部の名詞を除き、正書法では区別されているはずの複数語尾が話し言葉では発音されてはいない。むしろ、単数、複数の区別は、次第に、名詞そのものの形態論的な区別から、冠詞や代名詞、動詞の一致といった名詞をとりまく統語的コンテクストによって支えられるようになってきている。また「単数」「複数」に関わる「可算」「不可算」という区別について見てみると、フランス語では、英語ほどはっきりと名詞ごとに決まっているものではなく、コンテクストや発話者の意図によって自由になる部分が大きい。代名詞の中には、ce や ça のように、コンテクストに応じ、複数も単数も自由に受けなおすことができる形式も存在する。こうした「数」の区分におけるコンテクスト依存性は、もちろん、日本語ほどでないにしても、英語や他のロマンス語に比べれば、フランス語にはよく見られるものである。全ては相対的な問題だ。「単」「複」の区別を考えるのであれば、名詞以外の要素についても目をむけながら、フランス語全体の特徴を記述すると面白いことが見えてくるかもしれない。

最後は、藤村逸子氏による講演である（題目「人間名詞を含む NN 複合語の生成：日仏語対照研究」）。

フランス語に存在する文法上の性のシステムは一般に形態論で扱う問題と考えられている。本講演では、文法上の性が、名詞 ＋名詞からなる NN 構文における二つの文法的事象にどのように関わるかを構文化の枠組みにおいて考察し、文法上の性がフランス語の構文ネットワークの中で construction「構文」としての役割を果たすことを明らかにした。

藤村逸子氏（名古屋大学名誉教授）
人間名詞を含む NN 複合語の生成
：日仏語対照研究

最初に、NN 構文は、日仏語対照研究の観点から比較可能性をクリアすることが容易な対象であることを説明した。第一の問題は N と N の間の語順であり、フランス語の＜N＋homme/femme＞／＜homme/femme＋N＞と日本語の＜N＋男 / 女（性）＞／＜男 / 女（性）＋N＞を比較した。

第二は無生物名詞と親族名詞間の共起の制限の問題であり、フランス語の maison mère（家―母、「親会社」）, 日本語の「親会社」のタイプを比較した。方法としては、コーパスから得た 9000 件を超えるデータを定性的、定量的に観察した。コーパスはフランス語の第一の問題は Le Monde 誌、第二の問題は Le Monde 誌と Frantext を使った。日本語では、フランス語と近似したデータを得るために、第一の問題には BCCWJ のうちの「新聞」と「雑誌」、第二の問題には「Yahoo 知恵袋！」と「ブログ」を除いた全体を用いた。

NN 構文の語順は日仏語間で正反対になるのが標準であるが、予想に反してフランス語では femme médecin や femme gouverneur のように性別を示す femme(女) が前置される傾向が強い（前置 :90%、後置：10%）。フランス語では＜ femme ＋職業名詞＞の意味に曖昧性があること、複合語の性・数は前置要素の性・数に基づいて決まること、文法上の性を指示対象の自然の性に一致させようとする一般的な要求があることという 3 つの条件が働き、femme は准接頭辞として再分析される。名詞から准接辞への変化は文法的・手続き的構文化であるといえる。日本語においても＜男女（性）＋ N ＞ , ＜ N ＋男女（性）＞の両語順があるが、N が国籍、人種、年齢のような人間の特徴を示す場合には前置され、N が職業名を示し、名詞性が高い場合には後置される。この差異は日本語の標準的な意味論による説明が可能である。

共起制限の問題は以下のとおりである。フランス語では親族・王族名詞（mère, sœur, fille, reine, frère, roi）が比喩的に無生物の前置名詞を修飾するとき、名詞の指示対象の自然の性が文法上の性に変化して共起の制約となる（nationf sœurf （国―姉妹）, paysm frèrem（国―兄弟）など）。この変化は、名詞の意味的素性（指示対象の自然の性）の文法的素性（文法上の性）への類推化 (analogisation) による変化であり、これも文法的・手続き的構文化といえる。フランス語では maison mère （会社―母「親会社」）、maison fille（会社―娘「子会社」）は言えても ,maison fils（会社―息子「子会社」）は性の一致に反するために不可である。日本語では親族名詞 ＋ N の構文は家族構造のメタファーによってのみ形成され透明性の高い複合が作られる（「親会社」「子会社」など）。

フランス語の以上の二つの構文化は、構文ネットワークの中に [文法的振舞いとしての文法上の性] ⇔ [意味上の自然の性] のペアリングからなるスキーマ型の構文が存在するという条件が存在することに由来すると考えられる。

本講演の後では、NN 構文に現われる名詞の解釈や語順などをめぐり、日本語、フランス語に関して様々な質疑応答が繰り広げられ、充実した議論となった。男性形、女性形という文法性は、元々、ラテン語の名詞の曲用体系が簡素化される中で生まれたものであって、とりわけ自然性を表すために生まれたわけではなかっただろうが、歴史のある段階から、自然性との類推化が強く働くようになってきたことは事実である。生物、人間、人間に関わる名詞に関しては、自然性との一致が見られるのは当然と言えるが、藤村氏の研究に明らかにみられるように、次第に職業名詞や親族名詞と結びつく無生物名詞などへとその類推化による構文化が進んできているという点が興味深い。

名詞の文法的範疇はフランス語の特徴の一つであり、このような文法的範疇は日本語には存在しない。さて、このような文法的範疇を持たない日本語は現実世界の「数」や「性」には関心をよせない言語なのだと結論づけることはできるだろうか。意見は分かれるだろう。日本語では、現実世界の「数」や「性」の概念が名詞の文法的範疇に結び付いてはいないが、他の表現手段で表すことはできる。また、その解釈は文脈に依存して得られるものである。また、文法的範疇といった制約を持たず、文法的範疇や「一致」の規則を持たない日本語では、文法範疇の制約をうけるフランス語に比べて、より自由な語形成や文構成が可能なのかもしれない。名詞の文法的範疇という西洋のラテン語文法的な切り口から出発することで、垣間見られた日本語の特性については、さらに議論を重ねる必要があるだろう。

懇談会の折に、昨今のジェンダー論の話に触れつつ「言語では文法性としてのジェンダーの区別のない日本語で、女性の職業名詞や何かではそれほど困難は見られない日本語であるが、日本の社会文化的な面では、男女の区別をより厳しく課しているのは矛盾しているだろう」といった冗談も出たのだが、言語と社会、その関係は複雑である。社会は言語にとって重要なコンテクストをなしていることは確かだが、言語構造がそう簡単に社会構造の都合に合わせて変化するわけでも、あるいは社会構造が言語構造に合わせて簡単に変化してくれるわけでもない。言語も社会もそれぞれの構造を持ちつつ、お互いに影響を与えていると考える方がより現実的であるように思われる。言語学者としてできることの一つは、先入観にとらわれず、その関係を客観的にそして俯瞰的に観察することなのかもしれない。（秋廣尚惠）

The 29th “Contrastive Linguistic Research on Japanese and Foreign Languages” Workshop was held at TUFS on December 14th 2019. Presentations by Ikarashi Kochi (TUFS; Korean linguistics) and Puyo Baptiste (TUFS; semantics, French linguistics) were followed by a lecture from Fujimura Itsuko, Professor Emeritus at Nagoya University (French linguistics, contrastive research).

In “A Contrastive Grammatical Approach to Statement in Japanese and Korean”, Ikarashi Koichi contrasted statement in Japanese (chinjutsu) and Korean (jinsul), revealing the characteristics of each, overviewing existing research and suggesting further avenues of research on jinsul, which remains underexplored. Chinjutsu is difficult to define but can generally said to be the effect that makes a sentence a sentence. Definitions have been offered by Japanese scholars including Mikami Akira, Hattori Shiro, Okutsu Keiichiro, Watanabe Minoru, Teramura Hideo and Onoue Keisuke. In Korean linguistics, researchers note the influence of Yamada Grammar on the work of Choe Hyeon-bae (1937), who basically follows Yamada’s treatment of chinjutsu, distinguishing it from tokaku-sayo. Although Japanese and Korean have many linguistic similarities, debate concerning chinjutsu has been much more prolific in Japan than in Korea.

The presentation reviewed the historical background of academic debate in the two countries in an attempt to provide a contrastive grammar. (TUFS Otani Naoki)

In “Contrastive Research on Plurality in Japanese and French Nouns”, Puyo Baptiste gave the example of “frog[s]” in the Basho haiku “Old pond — frogs jumped in — sound of water.”, considering the concept of “plurality” and observing the differences in plurality between Japanese and French nouns. French nouns, pronouns and verbs have grammatical number. Countable entities must be marked either singular or plural, disallowing ambiguity. Japanese, however, is “indifferent to number” for nouns, pronouns and verbs. Japanese lacks word-final morphemes expressing number so no morphological distinction is made between singular and plural.

The connection between number and nouns thus varies. Languages like French show a direct connection between the two, while in languages like Japanese they are not necessarily connected. The presentation offered many insights into the connection between number as a grammatical category and the linguistic expression of the concept of number, and the differences between Japanese and French in this regard.

Fujimura Itsuko’s lecture was titled “Generation of NN Compounds with Nouns Expressing People: A Comparison between Japanese and French”. The system of grammatical gender in French is normally treated as a morphological issue. The lecture used the framework of constructionalization to reveal how grammatical gender relates to two grammatical phenomena observed in NN compounds and its role in the construction network of French. Professor Fujimura first showed Japanese and French NN compounds to be valid objects of comparison. After comparing differences in word order between French (<N+man/woman>) and Japanese (<man/woman+N>), she compared collocation restrictions for inanimate and kinship nouns of the type maison mère “house mother” and oya-gaisha “parent company”. Qualitative and quantitative analysis was conducted on over 9,000 corpus examples drawn from the Le Monde and Frantext corpora for French and the BCCWJ for Japanese. The second half of the lecture included lively discussion about the interpretation and word order of nouns appearing in Japanese and French NN compounds. (TUFS Akihiro Hisae)

国際日本学研究院 主催／国際日本研究センター 比較日本文化部門共催 国際ワークショップ＆講演会『済州と沖縄をつなぐ』報告
Report on International Workshop and Lecture “Linking Jeju and Okinawa”

2019 年 12 月 19 日・20 日に、東京外国語大学 国際日本学研究院 主催／国際日本研究センター 比較日本文化部門共催・国際ワークショップ＆講演会『済州と沖縄をつなぐ』が開催された。12 月 19 日には、『済州と沖縄をつなぐ』のテーマのもとで、慶熙大学校国際学術大会（2019 年 11 月 15 日）報告「「沖縄学」は可能なのか―ポスト伊波普猷時代の挑戦と展望」（友常勉）のあと、金東炫氏（文学評論家、済州大学校）による「済州の視座から読み解く沖縄」が行われた。コメンテーターは上原こずえ氏（本学）。金東炫氏の講演では、1948 年に韓国・済州島で起きた「４・３事件」の歴史的背景と現在、そして真相究明と記憶の掘り起こしを進めている調査研究の現状、さらに沖縄の近現代史と結びつけながら考えていこうとする粘り強い思索が展開された。翌日の

金東炫氏
（文学評論家、済州大学校）

12 月 20 日は、「4・3 事件」関連映像上映のあと、金東炫氏から、「東アジアにおける済州島のポジショナリティ―済州 4・3 事件を中心に」と題した報告がなされた。前日の報告・討論を踏まえて、「犠牲者の選別」など真相究明の上での重大な争点など、調査研究活動の現在が、事件の写真資料をまじえて説明された。二日間あわせて 50 名以上の参加者があった。

上原こずえ氏
（東京外国語大学）

なおこの国際ワークショップは、慶熙大学校国際学術大会「「沖縄学」は可能なのか―ポスト伊波普猷時代の挑戦と展望」（2019 年 11 月 15 日）と連携しながら開催された。慶熙大学校の大会には本学から友常勉、キム・ウネが報告者として参加しており、今後とも協力しながら活動を継続していきたいと考えている。

On December 19th and 20th 2019, the international workshop and lecture “Linking Jeju and Okinawa” was hosted by TUFS Institute of Japan Studies and cohosted by TUFS ICJS Comparative Japanese Culture Division. Lectures over the two days, including “Deciphering Okinawa from the Standpoint of Jeju” from literary critic Kim Dong-hyeon (Jeju National University), showcased the historical background and current significance of the 1948 Jeju Uprising, the current state of research surveys searching for the truth and unearthing memories about the uprising, and persistent efforts to consider it in connection with the modern history of Okinawa.

今後の活動予定

みなさま

新型コロナウイルスの発生・拡大にともない、2月から予定されていた国際日本研究センター主催の事業は中止または延期とさせていただきました。これには、日本語・日本研究コンソーシアムにかかわる次世代のための国際日本研究ワークショップも含まれます。延期された事業については、事態が収束し次第、あらためて実施したいと存じます。みなさまのご理解をお願いする次第です。

国際日本研究センター長　友常勉

DUE TO THE EMERGENCE AND SPREAD OF THE CORONAVIRUS, EVENTS SCHEDULED TO BE HELD BY THE INTERNATIONAL CENTER FOR JAPANESE STUDIES SCHEDULED FROM FEBRUARY ONWARDS HAVE BEEN CANCELLED OR POSTPONED. THIS INCLUDES INTERNATIONAL WORKSHOPS AS PART OF THE JAPAN AND JAPANESE STUDIES CONSORTIUM FOR NEW RESEARCHERS. WE HOPE TO RESCHEDULE THOSE EVENTS THAT HAVE BEEN POSTPONED AS SOON AS THE SITUATION RETURNS TO NORMAL AND ASK FOR YOUR UNDERSTANDING.

TOMOTSUNE TSUTOMU, DIRECTOR, INTERNATIONAL CENTER FOR JAPANESE STUDIES.

対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第30回 研究会（延期）

以下の方々をお迎えして2020年2月29日に開催予定でした。

発表：早津 惠美子 氏（東京外国語大学：言語学、日本語学）
題目：連語における使役動詞 (V-(サ) セル)
発表：幸松 英恵 氏（東京外国語大学：日本語学、日本語文法論）
題目：近世後期江戸語のノダ ー現代語との対照に基づく古典語文法研究の試みー
講演：松本 曜 氏（国立国語研究所：意味論、認知言語学）
題目：諸言語における移動経路の表現：共通性と差異

講演要旨：各言語の話者は、人や物の移動をどのように表現するのだろうか。その表現パターンには興味深 い共通性と差異がある。この講演では、国立国語研究所の対照言語学プロジェクトにおいて行わ れてきたビデオ発話実験の成果に基づいて、その共通性と差異を考察する。具体的に考察するのは、移動経路の表し方である。UP, DOWN, INTO, OUT, TO, FROM, ACROSS, ALONG などの経路の表現に どのような傾向があるかを考察し、今まで行われてきた移動表現の類型論を再考する。また、複数 の経路局面を含むルートの表現についても比較を行う。東京外国語大学において行われた研究にも触れる。

開催日程が決まりましたら、改めてご案内いたしますのでどうぞ楽しみになさってください。（谷口龍子）

「社会的実践としての批判的談話研究」講演会（延期）

2020年3月18日に、批判的談話研究 (CRITICAL DISCOURSE STUDIES, 以下CDS) で著名な野呂 香代子 氏（ベルリン自由大学）と名嶋 義直 氏（琉球大学）をお招きし、講演会を行う予定でした。
平たく言うと、CDSは、言語使用の背景にある社会現象や個人のイデオロギーを分析、解釈することが期待されるもので、語用論、会話分析、心理言語学、社会言語学など学際的なアプローチも取る点が一般の談話研究と異なります。
残念ながら、新型コロナウィルス感染対策のために、講演会は延期となってしまいましたが、今年度中に開催を予定しています。野呂先生には「民主的シティズンシップ教育と批判的談話研究」、名嶋先生には「批判的談話研究を動機づけるもの」という題目でお話いただき、フロアとのディスカッションも予定しています。多くの方々のご参加をお待ちしています。（谷口龍子）

「次世代研究ワークショップおよび講演会」（延期）

【講演会】
日時：2020年3月5日 (木)、15時から
会場：東京外国語大学 プロジェクトスペース
（アゴラ・グローバル3階）
講演者：SCARLETT CORNELISSEN 氏
（STELLENBOSCH UNIVERSITY・SOUTH AFRICA）
タイトル：JAPANESE FIRMS AND THEIR INVESTMENTS AND INTERNATIONALIZATION IN AFRICA
【国際ワークショップ】
日時：2020年3月6日 (金)、15時から
会場：東京外国語大学 プロジェクトスペース
（アゴラ・グローバル3階）
報告①　SCARLETT CORNELISSEN 氏
（STELLENBOSCH UNIVERSITY・SOUTH AFRICA）
ASIA AREA STUDIES IN THE AFRICAN CONTEXT
報告②　吉澤 啓氏
（独立行政法人国際協力機構、アフリカ部計画・TICAD推進課専任参事）
日本とアフリカの開発協力、その歴史と今後の展望

30TH "CONTRASTIVE STUDY FOR JAPANESE AND OTHER LANGUAGES" RESEARCH SEMINAR, HOSTED BY THE COMPARATIVE LANGUAGE DIVISION (POSTPONED)

THE FOLLOWING WERE SCHEDULED TO BE HELD ON FEBRUARY 29TH, 2020:

＊ PRESENTATION: HAYATSU EMIKO
(TUFS: LINGUISTICS, JAPANESE LINGUISTICS)
TITLE: "THE CAUSATIVE VERB V-(SA)SERU IN RENGO"
＊ PRESENTATION: YUKIMATSU HANAE
(TUFS: JAPANESE LINGUISTICS, JAPANESE GRAMMAR)
TITLE: "-NODA SENTENCES IN LATE MODERN EDO – RESEARCH ON CLASSICAL GRAMMAR THROUGH CONTRAST WITH CONTEMPORARY JAPANESE"
＊ LECTURE: MATSUMOTO YO
(NATIONAL INSTITUTE FOR JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS: SEMANTICS, COGNITIVE LINGUISTICS)
TITLE: "THE EXPRESSION OF PATH OF MOTION IN VARIOUS LANGUAGES: SIMILARITIES AND DIFFERENCES"

SUMMARY OF THE LECTURE: HOW DO SPEAKERS OF VARIOUS LANGUAGES EXPRESS MOTION? PATTERNS IN THE EXPRESSION OF MOTION SHOW FASCINATING SIMILARITIES AND DIFFERENCES. THIS LECTURE OBSERVES SUCH SIMILARITIES AND DIFFERENCES IN THE EXPRESSION OF PATH OF MOTION, BASED ON THE RESULTS OF VIDEO EXPERIMENTS CONDUCTED AS PART OF A COGNITIVE LINGUISTIC PROJECT AT THE NATIONAL INSTITUTE FOR JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS. WE OBSERVE TRENDS IN PATH EXPRESSIONS INCLUDING UP, DOWN, INTO, OUT, TO, FROM, ACROSS AND ALONG, AND RECONSIDER PREVIOUS TYPOLOGICAL RESEARCH CONDUCTED ON MOTION EXPRESSIONS. WE ALSO COMPARE EXPRESSIONS INCLUDING MULTIPLE PATHS. REFERENCE WILL BE MADE TO RESEARCH CONDUCTED AT TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES.

DETAILS OF RESCHEDULING WILL BE ANNOUNCED AT A LATER DATE. (RYUKO TANIGUCH)

"CRITICAL DISCOURSE STUDIES AS SOCIAL PRACTICE" LECTURE (POSTPONED)

ON MARCH 18TH 2020, TUFS ICJS WAS SCHEDULED TO WELCOME NORO KAYOKO (THE FREE UNIVERSITY OF BERLIN), FAMOUS FOR HER WORK IN CRITICAL DISCOURSE STUDIES AND NAJIMA YOSHINAU (UNIVERSITY OF THE RYUKYUS) TO GIVE LECTURES.

CRITICAL DISCOURSE STUDIES ANALYZES AND INTERPRETS THE SOCIAL PHENOMENA AND INDIVIDUAL IDEOLOGIES BEHIND LANGUAGE USE. IT DIFFERS FROM STANDARD DISCOURSE RESEARCH IN ITS INTERDISCIPLINARY APPROACH, INCLUDING PRAGMATICS, CONVERSATION ANALYSIS, PSYCHOLINGUISTICS AND SOCIOLINGUISTICS.

UNFORTUNATELY, THE EVENT HAS HAD TO BE POSTPONED DUE TO THE CORONA VIRUS BUT IS SCHEDULED TO BE HELD WITHIN THE CURRENT ACADEMIC YEAR. NORO KAYOKO WILL SPEAK ON "DEMOCRATIC CITIZENSHIP EDUCATION AND CRITICAL DISCOURSE STUDIES" AND NAJIMA YOSHINAU WILL SPEAK ON "WHAT MOTIVATES CRITICAL DISCOURSE STUDIES". LECTURES WILL BE FOLLOWED BY AN OPEN FLOOR DISCUSSION. (RYUKO TANIGUCHI)

INTERNATIONAL WORKSHOPS AND LECTURE FOR NEW RESEARCHERS (POSTPONED)

【LECTURE】
MARCH 5TH, 2020 (THURS) 15.00~
VENUE: TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES PROJECT SPACE (AGORA GLOBAL, 2ND FLOOR)

＊ SPEAKER: SCARLETT CORNELISSEN (STELLENBOSCH UNIVERSITY, SOUTH AFRICA)
"JAPANESE FIRMS AND THEIR INVESTMENTS AND INTERNATIONALIZATION IN AFRICA"

【INTERNATIONAL WORKSHOP】
MARCH 6TH, 2020 (FRI) 15.00~
VENUE: TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES PROJECT SPACE (AGORA GLOBAL, 2ND FLOOR)

＊ PRESENTATION 1: SCARLETT CORNELISSEN
(STELLENBOSCH UNIVERSITY, SOUTH AFRICA)
"ASIA AREA STUDIES IN THE AFRICAN CONTEXT"
＊ PRESENTATION 2: YOSHIZAWA KEI
(AFRICA SECTION, JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY; COUNSELOR, TICAD PROMOTION DEPARTMENT)
"DEVELOPMENT COOPERATION BETWEEN JAPAN AND AFRICA: IT'S HISTORY AND FUTURE PROSPECTS"

OPEN TO THE PUBLIC (NO REGISTRATION NECESSARY)
LANGUAGES USED: JAPANESE, ENGLISH
COHOSTED BY TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES AFRICAN STUDIES CENTER

発行 東京外国語大学国際日本研究センター 〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラグローバル 2F
TEL 042-330-5794 E-mail info-icjs@tufs.ac.jp URL http://www.tufs.ac.jp/icjs/